

## 三田市のニホンミツバチ 4 逃去群 (2000-2001年)

大谷 剛\*

先に、1999年に観察したニホンミツバチ (*Apis cerana japonica*) の逃去群3群についての報告(大谷, 2001)をしたが、その後2年間で4群を処理したので、報告する。2000年は1群、2001年は3群である。

### 1. 三田市弥生が丘、マンション7階群 (2000.10.12)

- ・撤去依頼者： 三田市弥生が丘1丁目の弥生が丘マンションにお住まいの亀谷晶子氏
- ・蜂群： マンション7階の東側ベランダに面したフローリングの洋室に入りこんだ逃去群 (約9000匹)
- ・協力者： 小賀泰次郎氏

博物館から約0.4kmしか離れていないマンション7階の東面のベランダから飛来し、リビングルームのソファに集結していた(写真1)。1999年の「鐘突き堂群」は地上から約5.5mの鐘突き堂のひさしのところに造巢していたし、「電柱群」は6.5mの高さに集結していたので、かなり高いと感じたが、今回はマンションの7階でずっと高く、およそ17mの高さだった。ふつうニホンミツバチの営巣場所や分蜂群・逃去群の集塊場所はそんなに高いところではない。吉田(2000:61)の報告では、青森県下北半島の野生群の営巣高度は1.5~2mである。菅原(1998)が大府府東北部で調べた自然巣24例の巣門の高さは3~500cmの範囲で、平均108.5cmである。これが分蜂群になると、もう少し高くなり、6例の高さの範囲は1.5~5mで、平均2.9mである(菅原, 1998)。もっと高所の報告は枚方市の磯島高校体育館の壁に開放巣を造った例で、地上13mである(菅原, 2001)。興味深いのは最大の捕食者・オオスズメバチ (*Vespa mandarinia japonica*) との関連で、地上のニホンミツバチを襲ったオオスズメバチが13mの巣に気がつかなかったという。

このマンション7階群は兵庫県立人と自然の博物館に持ち帰って、ジーンファーム(温室棟がある圃場)内の養蜂場で飼養した(写真2)。2000年はオオスズメバチに発見されず、このマンション7階群は無事に越冬した。その後、蜜もかなり集めて元気に暮らしていたが、2001年8月3日に逃去してしまった。それまで西日が毎日長く当たる位置に巣箱を置いたため、コントロール不能になるまで巣箱が異常に暑くなったと推測された。ニホン

ミツバチ専用巣箱 (AY巣箱) に入っていた9枚の縦長巣枠は、蜜がたっぷり入った状態で、溶けかかっていた。

ニホンミツバチは何か生活条件が悪くなると、巣も蜂児も捨てて逃去することが知られている(岡田, 1997)が、逃去が起こる条件として佐々木(1999:54)は、「夏になって日当たりがよすぎるための高温」を挙げている。

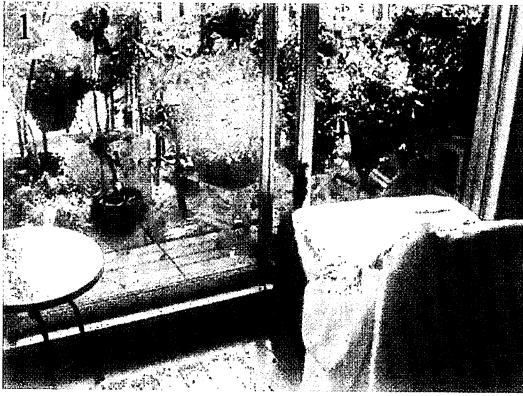
### 2. 三田市武庫が丘、武庫小群 (2001.9.11)

- ・撤去依頼者： 三田市立武庫小学校(三田市武庫が丘4-13)・水船正和校長
- ・蜂群： 校庭北側のアメリカフウ(モミジバフウ)の木に取り付いた逃去群 (約12000匹)
- ・協力者： 鈴木久代氏・渡辺庸子氏・古山 暁氏

水船校長の依頼を受け、午前10時過ぎ、直線距離で約0.6kmしか離れていない現場に行ってみると、すでにハチたちは校庭の北側にあるアメリカフウ (*Liquidambar styraciflua* L.) 約1.7mの高さの枝にぶら下がっていた(写真3)。収容前に子どもたちが集まってきたので、希望者を募り、表面のハチにそっと触れさせ(写真4)、分蜂群や逃去群はつかまないうちに、刺さないことを強調した。輸送用の巣箱に収容してから、校長や教頭に、せっかくこの学校にやってきたのだからと、飼養を提案してみたが、受け入れられなかった。飼育の経験がなければ、無理な話である。しかし、子どもたちは興味津々で飼ってみたいと言っていた。このように博物館の近隣で頻繁にニホンミツバチが出没するなら、予めミツバチの飼育方の講習会を教師向けにすべきかもしれない。

この武庫小群は博物館ジーンファーム内養蜂場に運び、マンション7階群が置いてあった場所の近くで日陰になるところに設置し、次の日に、マンション7階群に使用していたAY巣箱に入れ替えた。ハチたちは喜んで入りこんだように見えたが、2日後に逃去してしまった。今年、網室横の養蜂場を見つけてしまったオオスズメバチが盛んに飛来してセイヨウミツバチたちを捕食するようになっており、それが原因で再逃去したと考えられる。

\* 三田市弥生が丘6丁目 兵庫県立人と自然の博物館内  
姫路工業大学 自然・環境科学研究所 生態研究部門



### 3. 三田市あかしあ台、あかしあ台小群 (2001.9.27)

- ・撤去依頼者： 三田市立あかしあ台小学校 (三田市あかしあ台2-6)・中村やちよ教頭
- ・蜂群： 正門わきのアカシアに集塊した逃去群 (約5000匹)

午前11時過ぎ、三田市立あかしあ台小学校の中村教頭から、分蜂群らしいミツバチが群れているとの連絡を受け、博物館から直線距離で約2.3km離れたあかしあ台2丁目の現場に行ってみると、小学校正門の右横にあるギンヨウアカシア (*Acacia baileyana* F. Mueller) の幹と木枠の間、約1.2mの高さに集塊していた(写真5)。アカシアのまわりにはアベリア (*Abelia × grandiflora*) が密に植えられており、かなり収容しにくい状況だったが、なんとか輸送用の巣箱に少しずつ導いていった。

このあかしあ台小群は、いったん博物館に持ち帰ったが、武庫小群のように再逃去される可能性があるので、知人の十場比路子氏(神戸市北区淡河町在住)の庭に運び、現在に至っている(写真6)。

### 4. 三田市山田、柿の木群 (2001.10.11)

- ・発見者： 元八景中学校教諭の菊田稔氏
- ・蜂群： 三田市山田の畑傍の小川横、柿の木に集塊した逃去群 (約6000匹)
- ・協力者： 永吉照人 (姫路工業大学自然・環境科学研究所)

前回の報告(大谷, 2001)のときに「電柱群」でお世話になった菊田氏から逃去群発見の電話が入った。今年からセイヨウミツバチの飼育を始めた永吉氏の自動車で、菊田氏と三人で約3.5km離れた現場に行ってみると、畑の用水路として流れている小川のそばにある柿の木 (*Diospyros kaki* Thunb.), 約0.5mの高さの枝に集塊していた。太い枝なので、揺すって下の箱に落とすことができず、蜂ブラシで掃き落とした(写真7)。

この柿の木群は収容後、永吉氏の養蜂場に設置し、現在に至っている。2001年11月29日の内検では、セイヨウミツバチ用の針金だけの巣枠に2/3ほど造巣した巣が2枚、セイヨウミツバチの巣板の半面を削り取って造巣した1枚の計3枚(蜂数は約4000匹)で生活していた(写真8)。

### 5. 小学校に飛来する理由

前回の報告では3逃去群中1群、今回は4逃去群中2群が小学校に飛来した。7群中3群(42.9%)なので、「また小学校か」という印象がある。周囲の環境と比べた小学校の特徴を考えると、1)子どもが多い、2)広い空

間がある、3)樹木が多いの3点ぐらいだろうか。1)は、上空から見た子ども集団が群れ生活を営むミツバチを惹きつける要素になる、という可能性もあるが、そういう視覚に関する研究はおそらく皆無と思われる。2)の広い空間は、いろいろな建物があるところを飛んでいるうちに、少し広い空間に出て、安心して飛び回れる状況となり、そのまま、狭い空間に入るのに抵抗を感じて、そこに留まってしまう。ありうる状況であるが、小学校以外の飛来場所がとくに広い場所でないので、違うかもしれない。

3)の樹木の多さは飛来と関係する可能性がある。一昨年電柱群と今回のマンション7階群を除く5群は樹木に取り付いている。しかし、樹木がまわりよりもたくさんある状況も小学校だけというわけでもない。そこで、2)と3)をからめて考えてみる。蜂群が少し開けた空間に出たとき、より狭い空間に入り込むよりも、その開けた空間内で目立った大きめの樹木を目安にして集結した、と考えるのが現時点では無理のない想定であろう。

### 6. 引用文献

- 大谷 剛. 2001. ニホンミツバチの2自然巣と3逃去群 (1999年, 宝塚市・三田市). 兵庫生物, 12(2):83-86.
- 岡田一次. 1997. ニホンミツバチ誌. 86 pp. 玉川大学出版部.
- 佐々木正己. 1999. ニホンミツバチ—北限の *Apis cerana*. 192 pp. 海遊舎.
- 菅原道夫. 1998. ニホンミツバチの自然巣とその生活—大阪東北部において—. ミツバチ科学, 19(1):37-41.
- 菅原道夫. 2001. 開放空間(高さ13m)の巣の1年(磯島高校体育館外壁の巣), 「ニホンミツバチ」のホームページから. <http://member.nifty.ne.jp/smk/isoshimanosu.htm>
- 吉田忠晴. 2000. ニホンミツバチの飼育法と生態. 135 pp. 玉川大学出版部.

### 7. Summary

Takeshi OHTANI (2002). A report on 4 absconding colonies of Japanese honeybees collected in Sanda City during the period 2000 to 2001. *Hyogo Biology* 12(3):. Institute of Natural and Environmental Sciences, Himeji Institute of Technology, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546, Japan.

Four absconding colonies of Japanese honeybees, *Apis cerana japonica*, were collected in the autumn of 2000 and 2001. 1) A colony of about 9,000 bees was observed

flying about a sofa in the living room of a 7 story building (October 12, 2000; Photo 1). The height at which the colony was observed, about 17 m, was unusual. This colony was maintained in the Museum apiary (Photo 2) until it absconded again during the summer heat on August 3, 2001. 2) A large absconding cluster of about 12,000 bees was observed on a branch (1.7 m) of a sweet gum tree (*Liquidambar styraciflua* L.) on the grounds of Muko Elementary School (September 11, 2001; Photo 3). School boys attempted to touch the bees on the cluster (Photo 4). This colony absconded again a few days later. 3) An absconding cluster of about 5,000 bees was collected from a branch (1.2 m) of an *Acacia* tree by the gate of Akashia-dai Elementary School (September 27, 2001; Photo 5). This colony was relocated to the garden of Mrs. H. Juhba in the Ohgo-cho ward of Kobe City (Photo 6). 4) A final absconding cluster of 6,000 bees was discovered by Mr. M. Kikuta on a branch (0.5 m) of *Diospyros kaki* by the side of a small river supplying a field in the Yamata district of Sanda City (October 11, 2001; Photo 7). This colony was moved to the apiary of Dr. Nagayoshi (Photo 8) to avoid the Japanese giant hornet (*Vespa mandarinia japonica*) flying frequently at the Museum apiary.

The reasons Japanese honeybee colonies prefer elementary schools (3 out of 7 cases in 1999-2001) were discussed in the last section.

#### (写真説明)

写真1. 三田市弥生が丘のマンション7階亀谷晶子宅のベランダに面したソファーに集塊したニホンミツバチ「マンション7階群」(2000.10.12撮影)。高さは地上から約17m。

写真2. 兵庫県立人と自然の博物館のジーンファームにある網室そばの養蜂場(2000.10.26撮影)。「マンション7階群」はAY巣箱(日本蜂研究会)に導入され、西日が最後までさす左端の場所で飼養された(白い矢印)。

写真3. 三田市武庫が丘にある武庫小学校のグラウンド西側。アメリカフウの枝に取り付いた「武庫小群」(2001.9.11撮影)。ニホンミツバチとしてはかなり大きい群である。

写真4. 「武庫小群」をおそるおそる触る小学生。強く圧迫しないように注意すれば、分蜂群や逃去群は刺そうとしない。

写真5. アベリアに囲まれたアカシアの木枠に集結した「あかしあ台小群」(2001.9.27撮影)。こういう状況での収容はかなり手間取ってしまう。

写真6. 「あかしあ台小群」を点検する十場比路子氏(2001.10.8撮影)。セイヨウミツバチ用針金枠に造巣が始まっている。この群は越冬に成功した。

写真7. 三田市山田の柿の木に集塊したニホンミツバチ「柿の木群」(2001.10.11, 菊田穰氏撮影)。筆者が蜂ブラシで掃き落とそうとしているところ。]

写真8. 「柿の木群」は永吉照人氏の養蜂場で飼育されていたが、越冬に失敗した。巣箱内にある3枚の巣板のうち、中心の巣板(2001.11.29, 撮影)。